令和3年度　静岡学園中学校･高等学校　自己評価

本校の教育理念	1. 自主自立の精神　･･･　自分で考え、判断･決断し、混沌とした社会で自立して生き抜くための「自主、自立の精神の尊重」 2. 共生の精神　･･･　地球上の全人類が地球規模の課題を協力して解決し、すべての生命がともに生きていくことを願う「共生の精神」の尊重 3. 真理と生命を尊ぶ精神　･･･　生命の尊厳に対する畏怖の心と人間としての誇りを持ち、私利私欲なく真理を追究し、真摯に社会に貢献しようとする「真理と生命を尊ぶ精神」の尊重 4. 進取の精神　･･･　新しい時代を見据え、どんな課題が起きても果敢に解決し、進歩させようとする「進取の精神」の尊重

本校の教育目標	1. 真のエリートの育成　･･･　知性･品性･高い倫理観、崇高な使命感を持った真のエリートを育成する 2. 地域社会に貢献できる人材の育成　･･･　郷土愛と地域愛を育て、様々な形で地域社会に貢献できる人材を育成する 3. 国際社会に貢献できる真のリーダーの育成　･･･　多様な価値観、幅広い教養とコミュニケーション能力を身につけ、日本文化を理解し、国際社会に貢献できる真のリーダ゛を育成する

教育の特色	これからの未来社会が抱える複雑で解決困難な課題を克服できる人材を育成するために、高校には全国初となる「教養科学科」を設置。従来の普通科以上に幅広く、深い知識とともに、領域横断的な視野を身につけ、「自ら考え、論理的に思考･分析し、知識を統合する力を養う。教養科学科として、本校独自の特徴的な専門科目を履修･修得していく。また、外部講師及び本校教員による「シズガク･ゴールデン･タイム（SGT）」は正規の授業ではないが、生徒にとって貴重な学びの機会となっている。その他にも、国際交流をはじめとした多彩な学びのプログラムが用意されている。

達成度　A　ほぼ達成（8割以上）　　B　概ね達成（6割以上）
C　変化の兆し（4割以上）　D　不十分（4割未満）

学年教科分掌	担当	No.	令和３年度重点目標	具体的施策及び計画	達成状況（重点目標を達成するために行った具体的事項）	達成度 A･B･C･D
学年	中学部	1	生徒･保護者から信頼される、安心･安全な学びの場を提供する。	ア）生徒の様子の情報収集(目配り･声掛け･孝友日誌等)を丁寧に行い、小さな異変を早期に発見する。生徒の成長を考えて適切な指導を行う。原則的に、何かあった場合にはその場で注意する。 イ）生徒指導上の情報を中学部および生徒指導課で確実に共有し、学校全体が1つのチームとなって指導に当たる。日頃の保護者との連絡についても、丁寧な対応をこまめに行い、不登校の生徒に対しては定期的に家庭訪問等を続けるなど学校との関係が希薄にならないように気をつける。 ウ）Classiを用いて、全体では「中学部通信」の配信、各学年部では1週間ごとに様子を伝える等、保護者が校内の様子をより深く知る機会を充実させる。	ア）1学年100名弱の小集団である利点を生かし、学年の中での情報交換は非常にうまくいっている。問題のある生徒についても情報が共有されている。 イ）オンライン授業においても、その時間に授業に参加していなかった生徒はすぐに家庭に連絡を入れている。各教科の課題についても、パソコンの操作に不慣れな生徒がいるため保護者に対しても課題を送信し、確実に生徒の手元に届くようにしている。 ウ）保護者会において、体育館に集めずに各教室にてzoom配信により実施。感染防止の目的で行ったものであるが、結果的に移動時間の短縮につながる。	A
		2	生徒に、将来の静学のリーダーに相応しい生活習慣と学習習慣を身に付けさせる。	ア）生徒が基本的な生活習慣を身に付けることの大切さに気づき、実践できるように導く。教員は大きな声で生徒と挨拶を交わす。 イ）生徒に家庭学習の習慣を身につけさせるため、朝学習や補講等を計画的に行うとともに、きめ細かな学習指導を行う。定期試験前などには計画的な学習を生徒に促す。また、英語教育の充実を図り、3年修了までに英検準2級の取得率6割、2級の取得者10名を目指す。 ウ）担任及び教科担任が常日頃から、孝友三心をはじめとする教育理念について語り、静岡学園の生徒としての自覚を根付かせる。静学祭，体育祭，球技大会等の学校行事において、先輩が後輩を指導する機会をつくることで、上級生の先輩としての立場を自覚させる。	ア）教員は積極的に生徒とあいさつを交わしている。現在マスク着用が基本的生活習慣となっているが、生徒ほぼ全員が不織布マスクの着用に協力している。 イ）オンライン授業･分散登校などの原因により、教科によっては朝テストを行えていない。その代わりに、各教科オンラインの授業において、一方通行の授業にならないように工夫をしている。また、技術的な問題において教員同士の教えあいを行っている。 ウ）学習が追いついていない生徒に対しては、放課後等を利用して、個別に指導することができている。	A
		3	総合的な学習の時間，SGT，特別活動を充実し、「知る」「考える」「表現する」を楽しめる生徒を育てる。	ア）総合的な学習の時間や広島平和学習，自然体験教室を通して、生徒が郷土･日本の歴史･文化についての理解を深める。また、中高生新聞と「教養科学の樹」を活用したNIE学習のさらなる充実を図る。 イ）SGTや特別活動など教科以外の活動にも積極的に取り組むよう生徒を促す。希望参加制のSGTの中学生平均参加率が2回となることを目指す。 ウ）総合学習の時間を使い、1年次には、年に数回グループで意見をまとめ、発表する活動を行う。2，3年次には、ディベートを行い、多面的な角度からの検討や筋の通った議論について学び、事後にまとめた文章を新聞に投稿し、掲載されることで生徒のやる気を促す。	ア）1年部の平和学習を体系的に実施することができた。体験者の講演を聴いて、感想を新聞社に投稿することから始まり、ミャンマーの亡命選手とのオンラインによるつながり、広島学習のまとめ等、充実した内容になった。 イ）コロナ渦で、全員登校が難しい中、2年生のSGTステンドグラスをやり終えることができた。 ウ）3年生は、予定していた沖縄への修学旅行が、目的地変更となったが、旅行の主旨を極力変えない方向で実施することができた。反省点は、急な変更となり充分な下見ができなかったことである。	B
	高校1年	4	授業･家庭学習など基本的な学習習慣を確立し、高校における学習スタイルの基礎を築く。	ア）授業において学習の基礎･基本の徹底を図りながら、孝友日誌やClassiを活用し、生徒が目標を持って積極的に授業に取り組む雰囲気を作り出す。 イ）目的を明確に、朝学習や週末課題等を計画的に実施しながら、家庭学習のリズムを確立しつつ、フォローが必要な生徒に対しては、個々に指導を行う。 ウ）外部模試では、偏差値54以上の生徒130人以上の輩出をコンスタントに目指す。	ア）授業、朝学習などを通し、多くの生徒が基礎･基本を徹底しながら、地道に取り組む雰囲気が醸成できている。ただし、普段の取り組みが覚束ない下位層の指導には多くの教員が苦労している。 イ）各教科で、授業と課題のサイクルを効率的に指導しており、コロナ対応でオンライン化した際にも継続的な指導が可能であった。経験を積むことでタフな指導メソッドが実現できている。 ウ）1月進研模試では偏差値54以上が147名に増えるなど上位層は順調。平均点偏差値も50を超えた。ただし下位層には課題あり。上位層への一層の指導はもちろん、各層での対策が必要。	A
		5	部活動･SGTなど様々な活動に積極的にチャレンジさせ、それらの経験を通じて総合力向上を図る。	ア）生徒それぞれに様々な活動の場を提供し、情報発信をするだけでなく、生徒の適性を見極め、積極的に活動に導く。 イ）Classi･ポートフォリオを活用し、様々な取り組みに対しての振り返りを着実に重ねていく。 ウ）緑風塾やLHRなどの活動を計画的に実施し、広い視野を養うとともに、進路意識高揚に結びつける。	ア）コロナ禍で制約も多い中、柔道部、卓球部、サッカー部など1年生の活躍も見られた。SGTへの参加も堅調で、「若者選挙パートナー」への参加、ボランティア活動をスタートする生徒もいた。 イ）Classiの日常的な活用は教材配信が主でまだ道半ばだが、折々にポートフォリオ機能を活用し、各自の取り組みへの振り返りを積み重ねることができた。 ウ）緑風塾、LHRともたびたび日程変更があり、計画変更に追われたが、そんな中でも有意義な探究活動や進路模索ができたと思われる。	A
		6	生徒が安心して生活できる環境を整え、学校生活の基礎を確立する。	ア）日頃の積極的な声かけや面談、Classiや孝友日誌などの活用により、生徒の不安や悩みを早期に発見し、様々な情報を適切に共有しながら対応、生徒へのサポートを重ね、信頼関係を築く。 イ）生徒の意識を高め、倫理観を豊かにするとともに、学校生活におけるルールを守れるよう、学年で統一した指導を行う。 ウ）感染症対策を適切に実施しながら、安心･安全な学校生活を維持する。	ア）各担任が精力的･断続的に面談などを行い、生徒との意思疎通、信頼関係の醸成に努めた。418名の入学者のうち、現時点で転退学5名、時数不足による留年見込みが2名だが、いずれも丁寧に対応できている。 イ）年度当初、ゴミ処理など不安もあったが、日頃の指導もあり、どの教室も概ね清潔･秩序が保たれており、人間関係のトラブルもほぼ無く、情緒面でも安定している。 ウ）教室における換気が必要を満たしているのか、マスク着用の徹底が功を奏してか、教室内での感染事例はほぼ無かったと考えている。飲食時の対策（黙食徹底）には苦慮した。	A
	高校2年	7	生徒および保護者が安心できる学校生活を提供する。	ア）生徒･保護者の声に耳を傾ける。二者面談を年間3回以上行う。 イ）生徒に関する情報を教員間で共有する。転退学者0を目指す。 ウ）他者を思いやる心を育てる。生徒指導事案0を目指す。	ア）生徒･保護者の声に耳を傾けている。二者面談をこまめに行い、生徒の様子を細かくつかむよう心がけた。担任以外の教員にも相談しやすい環境もつくっている。 イ）生徒に関する情報を教員間で共有している。諸事情で転学した生徒が3名おり、学校生活が安定しない者もいるが、家庭とも綿密に連絡を取り合っている。 ウ）生徒指導事案は1件である。家庭環境に起因する問題行動にも、教育的視点を持って対処している。	B
		8	生徒に2年生としてふさわしい学習習慣を身につけさせ、生徒の進学に対する意識を高める。	ア）朝学習や週末課題への取り組みを向上させる。成績不良者0を目指す。 イ）生徒に真の学力を意識させ、進研模試の平均点偏差値50以上、偏差値56以上の生徒数80名を目指す。 ウ）オンラインも含めたオープンキャンパスに一人最低1回は参加させる。	ア）朝学習や週末課題への取り組みを向上させるよう努力している。しかし、2学期には17名(1学期末から6名増)の成績不良者が出てしまった。 イ）生徒に真の学力を意識させている。1月進研模試の平均点偏差値(国英数)は46.7(7月から-2.3)で、目標の50を下回った。偏差値56以上の生徒数は34(7月から-36)名で、目標の80名を下回った。2月マークでは国英数の平均点偏差値は47.8、偏差値56以上の生徒は52名であり、マークと記述の差はあるが、持ち直してきている可能性もある。 ウ）現時点での第一志望の大学について、志望理由を確認するワークシートを書いた。高3担任の先生方から、受験生となる心構えを伝える取り組みを行った。。	C
		9	教員と生徒が一丸となり、学校行事や部活動を通して生徒の人としての力を育む。	ア）教員も生徒も、毎月1回は生徒の成長を促す能動的な行動を起こす。 イ）緑風塾と修学旅行をうまくつなぎ、1年間で生徒の自己評価を高める。 ウ）学年の生徒に関する、学年外からのプラス評価を毎月受けることを目標とする。	ア）毎月1回は生徒の成長を促す能動的な行動を起こすよう取り組んでいる。 イ）コロナの影響で、緑風塾では予定していた学習は積み上げられなかったが、クラスでの発表はできそうである。第5波と第6波の隙間で修学旅行に行けたことは本当にありがたい。生徒の自己評価は少しずつ高まっている。 ウ）学年の生徒に関する、学年外からのプラス評価を毎月受けることを目標としている。毎月とまではいかないが、評価する声は届いている。	B

	高校3年	10	生徒・保護者が安心できる学校生活の提供。	ア）日誌の活用・面談などで生徒を把握し、生徒一人ひとりに目を向けたきめ細かいサポートを行う。 イ）生徒に関する情報を学年・養護教諭・スクールカウンセラーと共有し、多くの教員が生徒に関わる体制をつくる。 ウ）ルールやマナーを守らせる指導を行い、落ち着いた生活・学習環境をつくる。	ア）日誌などを使った日頃のコミュニケーションはもちろん、大学入試に関わる個別面談や保護者との連絡をこまめに行うことができた。休日などを活用して時間をかけて丁寧に行う機会も多く見られた。また、Classiを通して、保護者や生徒に情報を発信することも心がけた。 イ）学年部や管理職、養護教諭、カウンセラーと情報共有を密にし、さらに教科担当の先生方にも力を貸していただき、心に不安を抱える生徒を支えていくことができた。卒業が危ぶまれる生徒もいたが多くの支えにより、笑顔で無事卒業することができた。 ウ）生徒自身の成長と、大学入試を控えている緊張感もあり、比較的落ち着いた学校生活を送ることができた。コロナ感染拡大防止に関わるルールも加わりストレスもあったかと思うがしっかりできた。	B
		11	学年全体の学力の向上。	ア）授業や家庭学習の取り組み方など、改めて基本的な学習習慣の見直しと質の向上を図る。 イ）これまで実施してきた朝学習・週末課題に加え、進路系補講、放課後や長期休暇中の自学自習教室などを実施し、生徒の学習を支援する。 ウ）Classiなどを活用し、日々の学習や定期試験・模試の振り返りをさせるとともに、適切なアドバイス、声かけに努める。	ア）基本的な学習習慣の確立には初期指導が大事であるが、オンライン授業の受け方や家庭学習のやり方なども指導が必要である。学力下位層はもちろんだが、受験に向けて力を伸ばしていきたい中間層に対しての指導の必要性を感じた。 イ）進路系の補講は、コロナ感染症対策をとりながら慎重に行い、国公立大入試直前まで行うことができた。また、長期休暇の自習室の開放は、生活のリズムを崩さず落ち着いて学習できる機会となり、家庭研修に入った後も、教室で黙々と学習する生徒が多く見られた。 ウ）年度初めClassiを使って、家庭学習の記録や試験の振り返りを行うようにしたが徹底できず、結果的にこれまで通りの記録シートの活用となった。生徒にとって一番良い方法は何か、改めて議論する必要がある。	B
		12	生徒の進路実現の支援。	ア）外部模試の結果や面談等を通じて生徒の進路希望をできるだけ細かく把握し、適切な指導に当たる。 イ）進路実現に向けて生徒が主体的に活動できるよう、大学や入試に関する情報を提供する機会を設ける。 ウ）学年部だけでなく、多くの先生方にも協力を依頼し、多様な入試に対応した指導を行う。	ア）計画よりも多くの外部模試を実施し、生徒が自らの成長を確認、振り返る機会を設けると同時に、二者面談も行い、積極的なアドバイスを行った。 イ）校内で実施する大学説明会では、対面だけでなくオンラインで参加してくれた大学も多く、生徒にとって有意義な時間となった。コロナ対応のオンライン大学説明会は、生徒が気軽に参加できる実施形態なので、積極的に参加するよう声かけをした。 ウ）様々な学部・学科の小論文や面接試験に対応するため、多くの教科・科目の多くの先生方の力を借りながら指導することができた。教員一人に対する負担が減ったことにより、じっくりと時間をかけ、専門的な内容の指導も行うことができた。	B
教科	国語	13	自らの目標に向かって主体的に学習に取り組む生徒の育成	ア）個々の生徒のレベルや要求に応じたきめ細かい指導を各学年で協力して行う。 イ）朝テストや週末課題の実施など、家庭学習の充実を促すための指導を1年次から計画的に行う。 ウ）共通試験の平均得点が、探究系140点、その他の系110点以上になることを目指す。	ア）各学年の担当者が積極的に連絡を取り合って授業を進め、成績不振者への指導も協力して行った。 イ）オンライン授業の制約の下、できる限り各学年で朝テストや週末課題を計画的に実施し、基礎学力の定着を図った。 ウ）共通試験の難易度を踏まえたうえで、目標を概ね達成することができたといえる。	A
		14	新入試や新指導要領への対応を見据えた、効果的な指導方法の開発と授業改善	ア）活発な言語活動を通して、生徒自らが課題を見付け、主体的に解決する資質や能力を育てる授業を実践する。 イ）校内外の研修や研究会に積極的に参加し、新入試や新指導要領に関する情報収集に努める。 ウ）週一回の教科部会の時間を活用し、教材研究の充実を図るとともに、授業実践や研修の成果を共有する。	ア）生徒による意見の発表や課題解決を意識して授業に努める教員が多かった。 イ）コロナ感染対策を取りつつ、教員の研究授業と指導力育成研修を行い、十分な検討を行うことができた。 ウ）週に一度の教科部会において、授業進度や教材研究に関する情報を共有することができた。	A
	社会（地歴・公民）	15	生徒の学ぶ意欲、主体的に学習に取り組む姿勢の育成	ア）因果関係を重視することによって、生徒の「思考力」を育成する。 イ）各科目の授業において、プレゼンテーションやレポート作成など、生徒の主体的学習の機会を設定する。 ウ）各教員の授業の魅力を高めるための研修を積極的に行う。	ア）それぞれの授業の中で実践することができた。 イ）コロナ禍による制約はあったが、高1グローバルヒストリーを始め、各授業においてプレゼンテーションや探究的な学習を行った。 ウ）指導力育成研修、オンライン授業研修を実施し、各教員の授業指導力を高めることができた。	A
		16	新入試や新指導要領への対応を見据えた授業の改善	ア）新教育課程の授業内容を各科目において詳細に検討し、シラバスの作成を行う。 イ）各科目の知識を関連付け、社会に見られる課題の解決に向けて考えさせる授業を行う。 ウ）言語活動を充実させることにより、考察を深めるとともに効果的に伝達する力を育成する。	ア）的確に情報を収集し、検討・対応することができた。 イ）SDGs等を意識することにより、社会問題解決の解決策を考えさせる授業を行うことができた。 ウ）コロナ禍による制約はあったものの、それぞれの授業の中でプレゼンテーションやレポートを取り入れることができた。	B
		17	大学入試に対応できる学力の育成	ア）朝テストや補講系SGTを積極的に活用する。 イ）生徒のレベル別指導や個別指導を行い、生徒の学力に応じたきめ細かい指導を行う。 ウ）大学入学共通テストにおいて、探究系は平均70点、探求系以外は平均55点を目標とする。	ア）補講や朝テストによって、高校3年生の授業進度の確保、受験対応を確実に行うことができた。 イ）個別指導や、レベル別・志望校種別の補講を行うことにより生徒のニーズに対応することができた。 ウ）各科目の難易度のばらつきを考慮すれば、ほぼ目的を達成することができた。	B
	数学	18	自ら学ぶ意識を持ち、主体的に学習に取り組む生徒を育成する。（指導）	ア）高校においては「授業」「週末課題」「朝テスト」、中学においてはそれに対応する教育内容の『連動』を強く意識し、実践する。 イ）個々の生徒のレベルに応じたきめ細かい指導を実践するため、教材のより良い活用を検討し、各学年で協力して指導にあたる。 ウ）生徒に数学の面白さを認識させ、生徒の探究心を高める内容豊富な授業を実践するため、教材や授業展開などの工夫を実践する。	ア）中高ともに「連動」を意識した指導が定着してきている。ただし、コロナ下でリズムが崩れてしまった側面もある。オンライン授業での学習習慣の定着には課題がある。 イ）同一評価集団内での連携は良い。単独集団に対してより手厚い指導体制にしていきたい。また、副教材の選定や活用法という点の議論はさらに深くしていかなければいけない。 ウ）多くの場面で先生方が定期的に情報交換をしている。	B
		19	多様化する入試に対応できるような指導方法を研究する。（教材研究）	ア）基礎の確立を意識した作問を心掛ける。 イ）昨年度の入試をより深く分析し、本校生徒の課題を意識しながら指導にあたる。	ア・イ）各先生方の表現で、様々な工夫をしながら作問が出来ている。また、中学入試、高校入試とも、入学後の指導に参考になるような出題が出来ている。	A
		20	教員の教科観の共有、授業内容・指導方法・評価方法を検討する場として教科部会を機能させる。（組織）	ア）教科部会や研究授業検討会において、指導方法・課題の出し方・課題の取り組ませ方・評価方法の工夫の取り組みを共有できるようにする。 イ）各学年での取り組みの情報交換・情報共有を行い、教養科学科の数学科としての指導方針「静学メソッド」を確立する。 ウ）統計分野の研修を今年度中に実施できるよう準備研究を進める。	ア・イ）9月の教育実習生の研究授業ではオンライン授業の実践などの情報交換をすることが出来た。また、それぞれの先生方が活用機会を意識した授業を展開してくださり、授業評価アンケートでも数値として上昇傾向が見られた。ただし、「組織として」という観点では不十分であったことは否めない。 ウ）目標に掲げながら、計画すら立てられていない。猛省している。	B
	理科	21	新学習指導要領に沿ったシラバスの作成および実行に向けた授業改善	ア）現象について正しく理解する時間や実験結果を推測する時間を、今まで以上に設ける。 イ）身近な現象や社会的に問題となっている事象と関連付けながら授業を展開する。 ウ）新入試も意識した効果的な教材の選定とシラバスの編成を、他教科と連携しながら検討する。	ア）・イ）中学部の授業を中心に例年以上に実験を重視する授業時間が増えた。また、コロナ禍で度々オンライン授業とはなったが、高校でも共通テスト対策も視野に入れ身近な減少を科学的に考察したり検討する場面が増加した。 ウ）現状の条件下では妥当な教材の選定は行えた。ただし、新課程の教科書も出そろってはいないため、物理・化学・生物の新たな教科書が出そろう次年度も、重視していきたい課題である。	B
		22	薬品の精査と管理決定および老朽化した器具の整理	ア）薬品庫の管理について、持ち回り制での実行をより徹底して運用する。 イ）実験に利用したあとの薬品などを紛失しないよう、準備室や実験室の環境整備を徹底する。 ウ）老朽化した器具などの点検と廃棄処分などを実施し、新課程以降の取り組みに備える。	ア）・イ）コロナ禍の状況下で、思うように作業が進んでいない点がある。一方で、今夏に実施された薬剤師による薬品庫の確認作業時には、十分問題なく管理が出来ているという評価もいただけた。今後ますます利用が増えるであろう薬品などの管理体制をより効率よく運営できるものへと今後も変更できる点は変更していきたい。 ウ）廃棄処理などを夏から秋口にかけて無事行えた。また、新たな備品の購入も適宜実施した。	B
	英語	23	情報共有を密にし、組織化した指導体制を確立する。	ア）同一評価集団を受け持つ教科担当同士がこまめに進度調整を行う。 イ）分科会議での検討事項について教科会議にて審議を行い、英語科全体で問題意識を共有する体制を整える。 ウ）定期試験の範囲を2週間前に提示することを徹底 する。	ア）新型コロナウイルスへの対応により、結果として進度を確認する機会は増えた。全体として進度に遅れが見られる。特に新高校2年生の進度調整が必要である。 イ）オンライン英会話のあり方や観点別評価について検討し、英語科内で共有した。 ウ）各学年部において達成できた。	A
		24	多様化する国公立大学と私立大学入試について検証し、どちらにも対応できる指導方法を確立させる。	ア）共通テストの平均点について、探究系は平均点＋15%、一般クラスは平均点以上を目標とする。 イ）高校1、2年生のリスニング指導について、教材の運用を進め効果を検証する。 ウ）大学入試についての情報収集を行い、教科内で共有する。	ア）探究系については＋17%の平均点となり、目標を達成できた。一方で、一般クラスのリスニングに課題が見られた。 イ）高校1年生については、新たに採用した教材が効果的ではなかったと結論付けた。次年度の教材は現高校2年生が利用しているものに合わせる。高校2年生については、オンライン授業による影響などでリスニング指導にかける時間が減少し、特に一般クラスにおいて進度が予定していたよりも遅れが見られた。教材自体は次年度も継続利用する。 ウ）教科部会にて情報が入るたびに共有した。私立大学入試の出題傾向については、次年度以降も注視が必要である。	B
		25	中学3年生及び高校全学年にオンライン英会話を実施し、4技能のバランスの良い伸長を目指す。	ア）昨年度の提案を踏まえ、計5回のレッスン計画を作成する。高校3年生についてはできるだけ早い時期にレッスンができる環境を整える。 イ）法人本部や情報管理課と連携し、視聴覚室の環境整備を行う。 ウ）レッスンプランについて検証し、次年度の講座内容を選定する。	ア）高校3年生については、全て滞りなく実施することができた。高校3年生以外の、2月以降で実施予定であったオンライン英会話は、コロナ対応による遠隔授業やハイブリット授業の影響で予定通りの日程で実施することができなかった。 イ）情報管理課の手助けをいただき、より安定した通信環境を整えることができた。負荷テストの際には法人本部の方にもリモートで参加いただき、情報を共有することができた。 ウ）次年度の講座内容について、現状に則した形で選定することができた。	B

保体	26	運動能力・体力向上に努めるとともに、挨拶・礼儀を重んじ、協力性を高めさせる。	ア）多数の運動種目について多方面からアプローチすることで、授業全体の充実度を上げる。 イ）授業集団の能力や特性に対応しながらた授業計画や展開を工夫する。 ウ）安心安全に運動ができる環境を整え生徒が精いっぱい努力、挑戦できるようサポートする。 エ）日常の生活で活かされる礼節を身につけさせる。（服装・挨拶・態度の徹底）	ア)休校やハイブリット型の授業実施とになり生徒の体力低下が心配されたため、授業集団の状況などを考慮し、段階的に内容や強度など踏まえ授業を実施した。 イ)教員間で授業進度や生徒情報など共有しながら早めの対応をすることで授業内容を工夫して授業を実施した。 ウ)安全第一に実施することに重きを置き、新型コロナウイルス感染拡大防止を呼びかけながら取り組めた。 エ)日頃から生活状況に注意できた。	B
	27	新体カテストでは生徒一人ひとり身体活動向上に取り組む。	ア）日頃から新体カテストの種目の記録測定や練習を重ねることで意識を高める。 イ）基礎的な運動内容を取り入れ、授業内での基礎体力づくりを充実させる。 ウ）1学期で新体カテストを実施し、現状を把握させ、秋の実施までに記録向上に向けた取り組みを行う。	ア)毎授業の準備運動の中に全身運動や柔軟運動を取り入れるなど工夫した。しかしながら直前に休校措置となり実施自体が難しい状態となったが、なんとか授業中に工夫しながら実施することができた。 イ新型コロナ感染対策を講じた上で、)無理のない程度で身体の様々な部分を使えるよう工夫した運動を行った。 ウ)1学期の新体カテストの結果を意識し、できる範囲で秋の実施に向けた練習は行うことができた。	B
	28	教科書上での内容を自らの生活に生かせるように知識の定着を図る。	ア）「健康」とは何か？を考えさせることで日常生活の過ごし方など見直す機会をつくる。 イ）自己実現の方法を理解し実践させる。（人生の目標づくりの手助け） ウ）自己実現の方法を理解し実践させる。（人生の目標づくりの手助け） エ）より身近な具体的問題として認識し、交通安全への配慮の実践。 オ）AEDの使用法をマスターし、人命救助への知識と行動力を養う。 カ）地球環境保護の実践。（節電、ごみの分別・減量など）	ア)健康な生活習慣（特に休校中の過ごし方など）がきちんと送れるように一つ一つ項目について説明した。 イ)身体機能を高めるための効率の良い生活を考えさせることができた。 ウ)目標に向かって取り組むことで人格形成が作られるということを説明した。 エ)新型コロナ感染症を含め時事問題を取り入れ、通学状況等を踏まえ例に挙げながら危険と安全の意味を理解させた。 オ)いつでも誰でもAEDが使用できるよう、万一に備え救命救急について学ばさせることができた。 カ)SDGsを意識させながら身の回りで起こっていることから地球環境について焦点を当て説明した。	B
技術・家庭	29	授業を通して生活者としての問題意識を持たせ、広い視野に立ってものごとを見る姿勢を身につけさせる。	ア）グループワーク発表を通して意見交換をさせながら各自の考えを深めさせる。授業前と授業後の振り返りを確認する。 イ）生徒の参加型授業作りについての情報交換、研修会への積極的な参加をする。	ア)新型コロナウイルス対策を講じてグループワーク等の話し合いは思うように実施できていなかった。このような状況下でも何かできるように対応していきたいと考えた。 イ)今年度は予定通りに研修会等が実施されず、参加は一回のみ(オンライン)であったが良い機会であった。来年度も積極的に参加していきたい。	B
	30	実技・実習を通して生活的自立のスキルを身につけ、協働の力を育む。また、生活に役立つ作品作りを通して、ものづくりの喜びを知らせる。	ア）コロナ対策を徹底し、作業時短を取り入れた調理実習の工夫（高校1年、中学2年、中学3年）。 イ）エプロン製作（高校1年：調理実習で活用）。エコバッグ（あずま袋）の製作（中1）、ハーフパンツの製作（中2)お弁当作り(中3)。生活に生かせる木工作品（中1）、LED電気スタンド、マリーゴールドの栽培（中2)、プログラミングを利用したロボットの製作（中3）。 ウ）・高齢者擬似体験 ・新生児抱き人形の活用	ア)感染対策等を工夫し、調理実習を行うことができた。今後に活かし授業を展開していく。 イ)休校やハイブリット型授業となり予定通りに実習ができていないのが現状であるが、年度内に作品の完成を目指して授業や補習を行う予定である。 ウ)このような状況の中、コロナ対策を徹底したことで、例年通り高齢者の擬似体験を実施することができた。	B
	31	生徒が充実して安全に実習、製作に取り組めるように実習室の環境を整える。	ア）備品の整備、点検、補充。（包丁の手入れ、消耗品の補充を定期的に。ミシンの整備点検6月。備品の購入は前期までに計画的に行う。 イ）調理実習室の衛生管理を実習ごとに実施。（まな板の確認、引き出しのチェック、冷蔵庫内の整理） ウ）技術家庭科実習室の用具、教材の整理。生徒作品の管理の徹底。	ア)備品の点検については授業前や放課後等の時間を使って実施していた。補充に関しても生徒たちの不便とならないように常に留意していた。 イ)調理室は特に衛生面に留意し、消毒等にも配慮しながら使用することができた。実習中は特に換気等を行い、実施することができた。 ウ)技実実習室においては工具の消毒、机の清掃、作品の管理をし、安心し学びやすい環境を作った。	A
芸術	32	授業の質を向上させ、生徒が生活や社会の中で芸術や芸術文化と豊かにかかわる資質・能力を育成する	ア）周囲の世界や自然環境を深く観察し、そこから「美」「調和」「多様性」「面白さ」等を感じ取ることができるしなやかな力を育む。 イ）芸術文化に対し、そのよさや豊かさをどのように味わっているかについて自分の言葉で表現し、自分の思いや意図を周囲に伝える力を育むために鑑賞授業の工夫・充実に努める。 ウ）表現技能を習得することのみを学習の目的とせず、インフォーマルな学習を通して生徒の内発的な表現意図を高める工夫を行う。	ア）自然観察をしながら三原色を使って色づくりをする中で充実した制作を行うことができ、細やかな感性を養えた。 イ）友人が制作した作品を鑑賞して、対話やワークシートを通した相互鑑賞やアートカードの活用により、生徒自らが美術作品を鑑賞し、見たこと、感じたことを通して、鑑賞の資質・能力を広げ、また、深めることができた。 ウ)「生活や社会において芸術教科が果たす役割について」を課題としてきたが、表現や鑑賞の活動の中で生徒が自身の感性に基づく実感を通して十分理解し考えていくまでには至っていない。	B
	33	教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、社会や文化と深くかかわる学習のプロセスづくりを行う	ア）2年間の課題全般を通し、日本と西洋の価値観や世界観の相違を学び、日本文化を客観視できるようにする。 イ）生徒自身を取り巻く社会・文化・環境を意識した題材設定の工夫や、校内における展示の工夫を行うことで、芸術の学びと社会とのつながりを実感する力を育む。 ウ)常に教科の「見方・考え方」を念頭に授業を進めることにより、学習内容や学習プロセスが教科の本質から逸脱しないように留意し、「深い学び」の実現を目指す。	ア）デッサンと水墨画の表現の違いを学びながら、作品制作と振り返りにより深い学びを行うことができた。 イ）象徴的な記号を言葉にする鑑賞の授業を行ったり、フロアや図書館などで校内展示を行ったりすることで、校内及び校外の不特定多数の観客に、展示作品を通し、生徒たちの感性と、学びのプロセスを提示、紹介することができた。 ウ）単に創造する、鑑賞するといった活動ではなく、様々な知識や技能を生徒が自らの生活と関わらせながら熟考する場を設けることで、教科の「見方・考え方」を育む生徒は増えた。	A
	34	適切な評価基準を設定し、単元や題材のねらいを明確にする	ア）日々の授業において、生徒とのコミュニケーションを密にとり、表現に至らないイメージ、言葉に置き換えられない世界等を丁寧に見取り、一人一人の生徒への内的な動機付けを行う。 イ）生徒が課題に主体的に取り組むことができるような評価活動を工夫し部会内で定期的に実践報告を行う。 ウ）生徒一人一人が教科の本質に迫るような魅力的な課題づくりを行い、生徒の学習活動や成果物をインフォーマルに評価していくパフォーマンス評価の工夫を行う。	ア）自由制作の授業において、教師や他の生徒との対話を通して、発想や表現の広がりを実現できた。 イ）各授業での実践を、報告・協議することはできたが、コロナ禍の状況や、教員同士の授業シフトの問題により、互いの授業見学までには至らなかった。 ウ）授業のゴール、評価基準を明確に示し、「生徒が学び合う」協働学習を取り入れることにより、生徒の主体的な学びを実現することができた。	B
情報	35	生徒一人一人の好奇心を高め社会のリーダーとしての人材育成に必要な情報機器を、表計算による統計処理や情報整理、プレゼンテーションによる表現の道具として適切に活用できるように育成する。	ア）中学までの習得状況に差があるので、全体のスキルの底上げができるよう丁寧に説明する。 イ）小中の学習を基礎に、身近な事例をもとに情報に関する応用力を育てる。 ウ）全体的イメージを図版やイラスト・アニメーションを用い興味を持てる学習に心がける。	ア）基礎的な内容から丁寧に扱うことで、全体のスキルの底上げができた。 イ）ワープロ、表計算、プレゼンテーションについては、実習を通じて、技術の習得ができ、他教科でも使用できたが、分散登校により、プレゼンテーションのスライドの作成、発表など十分に行うことはできなかった。 ウ）ワープロやプレゼンテーションソフトにイラストや、アニメーションを入れながら文書やスライドを作ることができた。	B
	36	情報の収集・処理・表現を通して広くコミュニケーション能力を養い情報社会に積極的に参画する態度を育てる。	ア）情報の収集、処理、発信の基礎的な知識の習得およびマナーとルールを周知させ、法律についても触れる。 イ）法律については実例についても取り上げ、何が問題なのかどのように対応すればよいのか考えさせる。	ア）情報機器を用いた時のマナー違反、や法律に触れる内容について実際のニュースを見ながら解説ができた。 イ）法律について実例を用いて、問題点と対策について考えさせることができた。	B
教務部 教務課	37	教務課から全教員への周知事項を徹底し、全教員が共通認識を持って教育活動を行ない、教育活動の円滑な推進を図る。	ア）定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整える。重要な内容はそのイベントの7日前までに概要を発信する。 イ）常に新任の先生の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うのかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信する。 ウ）情報の発信方法としてはメールやe教務のグループウェアを使用するが、それらに頼らず直接コミュニケーションをとって確認し合うことも大切にする。	ア）定期試験の実施方法やルールなど、全教員が共通認識を持つため明文化したものを作成し、その時期に応じて随時情報発信を行うことで、全教員が共通認識を持って教育活動を行えるような体制を整えた。定期試験の監督表は試験初日の7日前までに発信できるように計画的に進めた。 イ）常に新任の先生の目線で、いつ・どこで・何を・どのように教育活動を行うのかを明確化できるように教務課から全教員に情報を発信するようにした。 ウ）情報の発信方法としてはメールやe教務のグループウェアを使用するが、それらに頼らず直接コミュニケーションをとって確認し合うことも大切にしてきた。	A
	38	教務備品、緑風塾・特別活動、学校行事について、教育活動が滞ることがないように、先を見通しながら管理・企画・情報配信を行う。	ア）教務備品や印刷室内の備品・印刷用紙の状況を日々把握し、不足分を早めに補うことで、教育活動が滞ることがないようにする。また、視聴覚機器についても破損などがないか確認し、常に最善の状態で教育活動が行えるようにする。 イ）緑風塾や特別活動については、学年主任とも連携をとりながら生徒にとって有益なものとなるように企画し、教員がどのように運営すればよいかの情報配信を行う。合わせて学力向上につながるように各学年部や進路部とも連携を図る。 ウ）月行事や週行事と日課について情報配信を確実に行い、特に非常勤講師への日課連絡に漏れがないように配慮する。また、月末に行うe教務への出欠入力について、点検と未入力者に対する督促を確実に行う。督促後、3日以内に入力の完了を目指す。	ア）教務備品や印刷室内の備品・印刷用紙の状況を毎朝把握し、不足分を補うことで、教育活動が滞ることがないようにしてきた。また、視聴覚機器については視聴覚のワーキンググループの委員と連携を取り、破損などがないか確認し、常に最善の状態で教育活動が行えるようにした。 イ）緑風塾や特別活動については、学年主任とも連携をとりながら生徒にとって有益なものとなるように企画し、教員がどのように運営すればよいかの情報配信を行った。学力向上にについては、学年部と連携し、中学では学習に向かうきっかけ作りや勉強会の実施、高校では補習や土曜授業の日程調整を行った。 ウ）月行事や週行事と日課について情報配信を確実に行い、特に非常勤講師への日課連絡に漏れがないように配慮した。授業と外部模試を同時に行う場合の行事予定表を備考欄にわかりやすくまとめ、授業計画が立てやすいように工夫した。また、月末に行うe教務への出欠入力について、点検と未入力者に対する督促を確実に行う。督促後、3日以内に入力の完了を目指した。	A
	39	教務課内の協力体制の強化に加え、日課業務について情報管理課や研修課とも協力体制を築き、関連する業務を共有し協力体制を整える。	ア）教務課全教員が教務課として行う任務を可視化し、常にだれがどのような業務を行っているのか把握できるようにする。また、お互いに業務の進捗状況を確認し合えるようにする。 イ）日課業務など教務課以外の人材と協力体制を強化するため、年間の教務課スケジュール表と日々の業務内容をまとめたものを作成し、業務を可視化することで先を見越して業務を行えるようにする。変化する学校行事や教務システムに合わせ、学期に1度はスケジュールの見直しを行う。 ウ）授業日は朝7：30に集合し、日課・時間割変更・代行を確認し合う。また、時間割作成や試験本部の運営などチームとして行う業務については、役割や業務内容の采配を工夫し、チームとして有機的に機能できるようにする。	ア）教務課全教員が教務課として行う任務を可視化し、常にだれがどのような業務を行っているのか把握できるようにした。また、分掌会議を通じて、お互いに業務の進捗状況を確認し合えるようにした。 イ）日課業務など教務課以外の人材と協力体制を強化するため、年度初めに年間の教務課スケジュール表と日々の業務内容をまとめたものを作成し、業務を可視化することで先を見越して業務を行えるようにした。コロナ対応により変化する学校行事にも関係各署と連携し素早く対応した。 ウ）授業日は朝7：30に集合し、日課・時間割変更・代行を確認し合った。また、時間割作成や試験本部の運営などチームとして行う業務については、役割や業務内容の采配を工夫し、チームとして有機的に機能できるようにした。	A
情報管理	40	静岡県「ICTを活用した教育」推進計画・法人の新高校整備計画・情報セキュリティ基本方針・インフラ整備提案依頼書などに従った情報システムを構築する。	ア）・インフラ整備 ・生徒用のPCを十分に活用できるようにする。 イ）校内生徒用端末として、ノートPC40台、ipad80台を追加し、各々の情報を活用する能力を高める。	ア）インフラ整備：生徒用のPCを十分に活用できるようにした。休校期間中の遠隔授業体制の敏速な対応（ZOOM／Google classroom） イ）成績データ(Classi・e教務)の管理：学年ごとの分担できめ細かく対応した。	B
	41	教務課・研修課・進路課と連携し、各アプリケーションにおける操作、データ連携を高める。	ア）出欠・成績データ・Classiの管理・・・学年ごとの分担できめ細かく対応する。 イ）学年上げの処理の担当を決め、担当を中心として行っていく。	ア）見通しのつかないコロナ禍において、遠隔授業と対面授業のハイブリッド型授業の実施における、システムの構築（情報管理課）、使用法の研修（研修課）、実施計画の作成（教務課）と、連携が保たれた。e－教務の実カテストの設定から運営、classiへの結果のuploadなど、情報管理課、進路課との間で、操作連携、データ連係がおこなわれた。 イ）教務システムがe－教務へ完全移行し出欠、成績、成績表、通信表、調査書、指導要録などスムーズにできる体制へすすんだ。また、各種帳票、表示などの改善を行った。	A

分掌	理課	42	教員のデジタル格差の是正と、データ処理技術の普及。	ア）機器活用のための情報を会議・メールなどで発信していく。 イ）各種研修会を学期1度程度企画し、Classi、e-教務、classroomの使用方法についてわかりやすく普及していく。 ウ）データ変換などの方法について実際に作業しながらスキルを上げていく。	ア．オンライン授業、オンライン英会話、家庭科、保健、GH、緑風塾など授業において各種機器活用の際には、e－教務グループウェアで施設予約を活用しながら教員が効率よく活用できた。 イ．初任教員の研修において各種機器の貸与、設定などを行うとともにアプリケーションの取り扱いなど教務課、研修課とともに共同して行った。その結果、多くの場所で、機器を活用することにより、体験入学、入試説明会などのzoomを使い動画を通して配信するなどスムーズに行うことができた。また、オンライン授業や、ハイブリッド授業への移行もスムーズに行うことができた。 ウ．e－教務を活用することで、各種データの入力を教員単位で行うことにより個人にあった入力方法で行い、e－教務内に入力データを再度取り込むことができた。	A
	研修課	43	教員自ら授業に対する検証を行い、授業改善および授業力向上を図る。	ア）授業評価アンケートの結果から課題を把握し、PDCAサイクルを実践することで授業改善を図る。また、必要に応じて管理職面接を実施する。 イ）年2回、保護者や一般の方々に対して授業を公開し意見を募る。また、外部識者を招聘しての研究授業を実施し、授業の講評、検討会を実施する。 ウ）初任・若手教員に対して、管理職、教科、学年部などからのサポート研修や助言を積極的に行う。	ア）本年度より授業評価アンケートを7月と12月の年2回実施し、年度内で授業改善の効果を確認できるようにした。アンケート結果について、教育実践オフィスFによる詳細な分析と具体的な改善方法を提供した。また、必要に応じて管理職面接を実施した。 イ）感染状況に注意しながら授業公開週間を実施し、保護者や一般の方々に対して授業を公開し意見を募った。また、外部指導員を招聘しての研究授業を実施し、授業の講評、検討会を実施し授業力の育成を図った。 ウ）初任・若手教員に対し、新任研修や教務研修等の各種研修を実施した。また、メンター制度を導入しサポートを図った。	A
		44	校外研修・校内研修を通して、教員の資質能力の向上を図る。	ア）教科ごとの他校での授業参観企画を促すとともに、資質向上に資する校外研修や自主的研修を奨励する。 イ）他校の授業参観については管理職に相談し、紹介を請う。 ウ）教員の要望を把握し、必要な校内研修を企画する。	ア）制限された中ではあったが、私学協会の研修は極力できるだけ参加してもらった。 イ）教員全体研修は、新型コロナ対策として体育館やオンラインを活用するなどエ夫することで極力実施した。結果、今年度は昨年度よりも2回増え5回実施した。 ウ）他校訪問は自粛した。	A
		45	教務部の各課と連携し、円滑な業務遂行を図る。	ア）教務課との連絡を密にすることで、研究授業や研修時の時間割変更を確実に行う。 イ）情報管理課と連携し、研修コンテンツの拡充を図る。また、オンライン研修についても協力し、円滑な運営を図る。	ア）教務課との連絡を密にすることで、研究授業や研修時の時間割変更を確実に行うことができた。また研究授業については、1回あたりの参加数10名の数値目標を設定し、すべて達成した。 イ）情報管理課とはオンライン研修等で連携し、円滑な運営に効果を上げた。 ウ）教員全体研修や授業評価アンケートのような準備・運営には人数が必要であったが、課を超えて教務部全体から協力を得ることができた。	A
	生徒指導課	46	生徒の自主性、主体性の育成を目指した生徒指導。	ア）生徒会活動への指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 イ）ボランティア活動の指導と支援により、生徒の自主性・主体性を育む。 ウ）部活動の活動や大会・発表会のアナウンスを行い、お互いに応援し合う雰囲気づくりを行う。	ア）コロナ対策を行い、縮小した形ではあったが、生徒会や体育委員を中心に静学祭・体育祭・球技大会を行うことができた。 イ）伊豆大雨災害ボランティア活動の準備を行ったが、中止になってしまった。来年度夏の東北ボランティア活動準備中。生徒発信のボランティア活動計画中。 ウ）各種大会の中止、延期が数多く出てしまいましたが、野球応援（希望者）、サッカー応援（希望者）を実施できた。希望者で行ったが、沢山の生徒が参加してくれた。	B
		47	学校生活における基本的生活習慣の習得、自らルールを守る心づくり。	ア）風紀委員・交通安全委員による活動を活発に行い、生活習慣の改善を促す。 イ）登校指導による交通指導・声かけ運動の継続、学校周辺の見回りにより、学校生活に対する基本的生活習慣の基盤、安全を確立する。 ウ）学校生活アンケート（いじめアンケート）を実施し、安心して学校生活を送る環境づくりを行う。	ア）風紀委員長の朝礼(ZOOM)での呼びかけ、風紀委員の各クラスでの呼びかけ活動を行った。 イ）登校時の交通指導を毎日実施した。 ウ）生地研・校外教育連盟等の会合で、他校との情報交換を 行い、生かすことができた。	B
	生活部 保健衛生課	48	健康の重要性に気づかせ、健康の維持、増進に必要な生活習慣を確立させる。	ア）各種健康診断を実施する。 イ）日常における観察(HR、授業、課外活動、保健室など)を行う。毎日検温をさせ、健康観察記録用紙を担任に提出させる。 ウ）健康維持のための指導、助言を行う。	ア）すべての健康診断を終えることができた。健康診断結果、その後の検査状況、保健室利用状況、スクールカウンセラー利用状況などをまとめた資料を作成し、2月の学校保健委員会にて、情報を共有した上、学校医からのアドバイスをいただいた。 イ）健康観察記録用紙を作成し、生徒全員分を印刷している。毎日、体温などを記入させることを、担任を通して行っている。 ウ）保健委員会を開き、保健室の使い方の指導、文化祭での消毒の徹底、献血の周知などを行った。さらに、保健委員には、健康診断の補助という役割を課し、健診の大切さを伝えた。	A
		49	感染症を予防し、感染症に関連する対策を行う。	ア）各教室に「保健だより」（月1回）を掲示してもらう。啓発ポスターを掲示する。 イ）生徒会保健委員会を通じて、生徒に対する啓蒙活動を行う。 ウ）感染状況の見える化（インフルエンザ感染者数を職員室前に掲示するなど）、手洗い消毒液の設置（各階の水道場と食堂に3個ずつ、その他、図書室前、事務の入口、体育館など、必要に応じて設置）、国、自治体からの感染症対策要請に基づき、効果的な対策を実施する。	ア）「保健だより」を毎月1回作成し、保健室前に掲示した。さらに、生徒全員分を印刷し、クラスでの配付を依頼した。掃除の際などに、教室で消毒をしている。 イ）年度初めに、保健委員会を開催し、感染症予防の呼びかけを各クラスで行うよう指導した。校内一丸となり、マスク着用をこころがけている。常時、少し窓を開けるようにしている。 ウ）手指消毒液を出入口などに設置し、補充している。さらに、12月の保護者会など、来校者の多い日には、消毒液を設置する場所を増やした。コロナ感染状況について、グループウエアに載せ、全職員が確認できるようにした。	B
		50	生徒が安心して学校生活を送る手助けをする。	ア）5月に「こころの健康実態調査」（今年度はClassiを利用する予定）を実施する。「いじめアンケート」の結果から生徒の様子を判断し、手助けの必要な生徒に対し相談を行う。 イ）学年主任・クラス担任・養護教諭・スクールカウンセラー・教育相談担当の情報を共有する。中学、高校1年、2年、3年の4グループについて、それぞれの主任（G＝学年）、養護教諭(H＝保健室)、保健衛生課（K＝教育相談担当）を主体とした情報共有の場（KGH）を月1回程度設ける。 ウ）学年間での生徒の実態の情報共有を促す。（月に一回程度の学年部会では必ず行うよう連絡をとる。）また、スクールカウンセラーからの助言をもとにした生徒への対応を行う。	ア）5月に初めてClassiを利用した「こころの健康状態調査」を実施した。来校の必要がないため、不登校気味の生徒からも回答を得ることができた。その後の個別面談も、分担して行うことができた。注意すべき生徒の見守りができている。 イ）学年主任、養護教諭、教育相談担当で情報を共有するための場である、KGHを毎月（8月は除く）設け、生徒の現状を、お互いに知ることができた。 ウ）保健室来室記録、出欠管理表、カウンセリング報告を作成することにより、管理職、学年主任とも内容を共有できた。12月の職員安全衛生委員会にて、生徒の安心のために、見守る大人同士のつながりが大切と判断し、職員室内に談話スペースを設ける準備を始めた。	A
		51	学校施設の日常時･非常時における防災安全体制の構築。	ア）新しい地震防災・災害対策計画（地震対策マニュアル）の定着・運用及び、防災倉庫の管理 イ）一斉メールの利用促進も含めた災害への対応、静岡県防災アプリと本校防災計画の連携 ウ）学期ごとに異なる防災訓練の実施（感染症対策として密を避けつつ）定番の訓練とイレギュラーを含む訓練、生徒の活動を主とする訓練の実施	ア）新防災マニュアルへ移行し防災訓練の実施を計画したが、コロナ感染症の蔓延に伴い、中途半端になってしまった。 イ）静岡県防災アプリの活用へ呼びかけを新入生保護者に行い、本校地震対策と合わせて活用のお願いをした。 ウ）火山噴火による津波警報への対応を発生後直ちに行い、入試時に同じことが起こった場合への対応策を作成した。	B
	安全整備課	52	定期点検や危険箇所への対処を万全なものとし、事故発生のないよう施設・設備の改善、保全を図る。	ア）計画的な生徒用机イスの入れ替え。（故障があり生徒がけがをする恐れのあるものを早期撤去） イ）校舎内・グランドなど学校施設の定期点検の実施（施設のみならず、構造的に事故の恐れのある場所の解消） ウ）生徒による清掃活動が滞りなく行えるよう、用具の点検・補充・改善を行う。	ア）特に体育施設の見回りに気を配り、破損個所など早めに補修・補修依頼を出すよう心掛けた。 イ）破損のひどい生徒用机の入れ替えを実施し、安全に机・イスを利用できるようにした。予算の都合ですべてを交換できたわけではないので継続的にやらねばならない。 ウ）コロナ禍で安心して生活できるよう、消毒器具の配置、消毒の補充を怠りなく行った。	A
	進路指導課	53	進路シラバスに基づいた進路指導計画を実施するとともに、進路指導室の活用を促す。	ア）進路行事の目的を各学年進路指導課教員を通じて生徒に周知し、生徒の進路意識を高め効果的に実施する。 イ）教科や学び支援課との連携により、生徒の進路実現にむけて多方面からのバックアップを行う。 ウ）進路指導室について生徒に周知し、進路指導室に来室する生徒の相談に積極的に応じる。	ア）高校3年生では、校内合同説明会、模擬試験やスタディサポートを新型コロナ感染対策をとりながら実施した。 イ）高校1、2年生では、8月の静学テストはコロナの影響で実施できなかったが、その他の行事については新型コロナ感染対策をとりながら実施することができた。 ウ）進路指導室の整備を行った。	B
		54	大学進学数値目標（国公立大学100、難関私立大学120）達成のために、補講を計画・実施するとともにテスト分析とフィードバックの仕組みを構築する。	ア）補講系SGTを効果的に実施するとともに、高校3年生の夏期・冬期特別授業中の補講や家庭研修中補講の充実を図る。 イ）FINE SYSTEMやCOMPASS、Classiにより、教員および生徒に振り返りの機会を提供する。 ウ）学年部との連携により、テスト分析会や講演会を企画実施する。	ア）平常授業日の放課後の補講および、夏期・冬期特別授業中の補講、家庭研修中の補講を実施した。 イ）小論文の個別指導の充実を図り、教員全体での指導体制をつくった。それにより、教員負担の平均化と生徒への手厚い指導を行うことができた。 ウ）ベネッセコーポレション担当者とともに模試やスタディサポートの分析を行い、各学年へのフィードバックを行った。	B
		55	大学入試改革に関する情報収集を行い、進路指導計画へ迅速に反映させる。	ア）入試改革に関する研究会に積極的に参加し情報収集に努める。 イ）教員全体での小論文および志望理由書指導体制を確立する。 ウ）学年や教科と連携し、情報を共有する。	ア）入試改革や新型コロナ感染拡大による変更に対して、予備校や業者から情報を収集し共有した。 イ）主体的な進路選択ができるよう、適性診断や講義動画視聴を実施した。 ウ）小論文を課す大学が増加したため、小論文個別指導体制を強化した。	B
	進路部	56	SGT外部講師講座は、毎年新しい講座を加えると同時に見直しを図りながらコンテンツを増やし、体験を通じて学ぶものから学術的な講座まで広く提供するように努める。	ア）体験型学習の講座を少なくとも3講座は開講し、特に中学生がのびのびと活動出来る講座を設置する。 イ）宗教学・心理学を含む人文系講座を2つ以上設置し、歴史に学び生命に対する畏敬の念を深める機会を設ける。 ウ）ふじのくに地域・大学コンソーシアムを活用し、大学の出前講座や研究機関との連携を深めながら高大連携を目指すとともに地域の知識人・有識者の出前授業を積極的に企画・活用する機会を設ける。	ア）著名人ではなく一般のさまざまな職業人とのCommunicationを主体としたOn-line職業講話を今年も開講していただき、6回の講座を実施していただいた。 イ）電動ろくろを使った本格的なハイレベル陶芸講座であるSGT 陶芸講座～ねんどで遊ぼう～を開講していただき、コーヒーポットやマグカップなど玄人はだしの作品を制作出来るような生徒が出てきた。 ウ）Global communicationでは、インドの孤児院代表補佐をつとめる後藤理恵氏を講師にお招きし、インド社会に対する知識と理解を深めるとともに参加生徒との質疑応答でインドの光と影を知ることが出来た。	A

	学び支援課	57	SGT内部講師講座は、授業の枠を越えた分野の教養系講座をなるべく設置出来るように事務職員を含めた職員に講座開講のお願いをし、生徒の授業以外の学びの場を支援するように努める。	ア）JMOOCの新規講座を確認し生徒から関心の高い心理学系の講座などを講座に加え、対応可能な教員がいるかを課で検討し担当者に打診する。 イ）やる気のある生徒を発掘するため、SGTの教室掲示用チラシを4月7日時点で出来るだけ掲示し、実施日予定日を明示して生徒の興味・関心を持たせるとともに参加への意識を高める。 ウ）朝礼、昼休みの放送を使った宣伝、SGTレポートやClassiを使った情報発信を活発に行い、参加への勧誘を積極的に行うと同時に1年間にSGTに積極的に参加した生徒を表彰する機会を設けることを検討する。	ア）コロナ禍による臨時休校のため事務職員に講座開講を依頼するまでには至らなかった。 イ）学び支援課長として身近な地域にある山下りんのイコンとハリストス教会に関する講座を2年ぶりに開講し、ギリシア正教会のイコンに対する崇敬についての理解とイコン画家第1号でしかも女流画家である山下りんに対する理解を深めた。 ウ）SGT中高生のための数楽教室では県立大学名誉教授小林みどり先生をお招きし、Critical Thinking入門と出して世の中の不思議なことを題材に数学の枠をこえた考え方の基礎についてご講義いただいた。	B
		58	緑風塾の充実に努める。	ア）Classiの活用研修に参加し、情報を共有しながらPortfolio機能のより効果的活用方法について検討する。 イ）SGDsをテーマとした探究学習につながるような教養系（特色系）連続講座を開講する。 ウ）大学生との協働研究が出来るような場を整えられるような講座の開講を検討する。	ア）コロナ禍ということもあり課長として積極的に緑風塾に関わることが出来なかった。 イ）SGT Global Communicationで静岡市子ども食堂ネットワーク理事長の飯沼直樹氏をお招きし、コロナ禍における子ども食堂の現状と未来と子どもの居場所作りとSGDsと題して高校1年生の緑風塾のテーマと関連性を持たせたSGTをハイブリッド形式で初めて開講した。 ウ）SGT静岡の歴史を学ぼう～静岡近代の偉人たち～と題して静岡市文化振興財団学芸員の太田那優氏を講師にお招きし、渋沢栄一を中心にご講義いただいたが、渋沢の書いた文書を生徒と一緒に音読することで渋沢の慶喜に対する思いと江戸時代のエコな生活についての理解を深めた。	B
総務管理部	総務管理課	59	入学式、始業・終業式、開校記念式・講演、芸術鑑賞、体験入学、入試説明会などの行事を、丁寧に遂行する。	ア）式典や朝礼などは、教室でズームを活用して行うことが多くなると思うが、表彰者の大会名や氏名に加え、写真や動画を画面共有するなどして、ズームだからこそできる運営を心掛ける。 イ）三回行われる体験授業は、同じことを三回行うのではなく、それぞれの回の差別化を図り、予め告知し、「未来コンパス」を通じて募集。本校受験を考えている受験生のリストアップを図る。 ウ）本校の流れとして大切に継承するもの（伝統）と、「本校の常識」に囚われることなく斬新に改めていくもの（革新）との両面から、式典や行事を見直す。	ア）入学式は、感染症対策として、保護者は教室でズームを通して参列して頂いた。ゾーニングも確実に行うことが出来た上に、教室のスクリーンにご子息が映し出されると姿をスマホで撮影する保護者も少なくなかった。式後には、最初の保護者会も行うことができ、機能的に作用した。 イ）始業式、終業式、毎月の朝礼は、ズームを通して実施した。部活動などの表彰は、氏名や階級を画面共有したり、生徒の顔をアップして撮影したりすることで、体育館で行うよりう、選手と生徒を近づけた。毎月の経験が、ズームを駆使して実施する体験入学や入試説明会などの企画を確実に運営させる基盤として作用している。 ウ）8月に行う予定だった第二回体験入学は、感染症の状況を見据えながら、結局、10月に実施することになった。8月に参加する予定でエントリーした受験生と保護者には、変更をメールで伝えたり、体育館を会場に行う授業を設定するなどして、出来る限り参加者の便を図りながら運営した結果、日にちの変更にもかかわらず、昨年度より多くの方々に参加してもらうことが出来た。	A
		60	PTAや同窓会などの活動を通じ、ご縁を結び、絆を深めるとともに、良質な文化資本を蓄積する。	ア）昨年度、会長を初め役員を刷新し、名簿を作成、新しくスタート切った同窓会に実をつけるため、荒削りでもいいので、11月に、本校体育館を会場に、総会開催を実現する。 イ）PTAの活動は、活発とは言い難い状況にある。保護者の視点を無視しても、過剰に意識しすぎても良くないので、程よく関われる場、例えば保護者が企画した教育講演会＋交流会などを模索したい。 ウ）第一線で活躍している様々なジャンルの方々を講師に、「大学訪問授業」と称した講座を長年に渡り実施（その成果は書籍にまとめられ出版されている）している神奈川の桐光学園に、コロナが落ち着いた頃、どのようにして講師を依頼しているのかなどなど学びに出かける。	ア）PTA総会は、昨年度同様、感染症対策として役員会と文書による会員の意思表示で行なった。事前に受付た意見に対しては、役員会の中で取り上げ説明したが、その様子を、今年度はズームを通して全ての会員が参加できるような環境を整えて行なった。 イ）同窓会では、年間5回に渡る役員会を開催しながら、同窓会活動の要諦となる名簿の発行と、10月には本校体育館を会場に総会を開催することが出来た。結果、同窓会の持つ豊富な資金と人脈を、本校の教育活動を支援する道筋を開くことが出来た。 ウ）同窓会では、年度末にその年度の授業報告及び決算と、次年度の事業計画と予算を立て、10月の総会で会員に報告するというリズムが出来つつある。来年度の事業計画としては、同窓会ホームページの立ち上げとSNSを通じた広報活動の充実と、全国高校サッカー選手権の優勝を讃える記念碑の設営を掲げている。	A
		61	仕事を分担しながら進め、仕事を通じて結ばれる方々のそれぞれの思いやご苦労に触れ、また仕事の意味合いなどに対する理解を深める契機となるよう心掛ける。	ア）始業式・終業式・朝礼・保護者会は八木香先生が中心となり準備。開校記念講演及び芸術鑑賞の演目は重松・林先生が中心となり選定を進める。林先生を中心に、「孝友」の編集を通じ、教育活動の記録に務める。 イ）部活動を紹介するリーフレットと動画、学校生活を紹介するリーフレットと動画など、本校の受験を考えている生徒に、学校生活の息吹を伝えるコンテンツの開発に務める。 ウ）同窓会との連携を、同窓教員でもある石井先生と八木香先生を中心に、PTAとの連携を、公立高校の様子を知っている松本先生を中心に進めていく。	ア）入学式や3回に渡って実施した一日体験入学に入試説明など、ズームを通して行う企画が増えたことにより、全校を挙げて運営する企画となっている。運営に当たっては「分掌を超えた様々な方々の善意」が結集され、企画を通じて教職員の相互理解が深められるようになっている。 イ）『学校案内』や機関誌「孝友」などの広報媒体の作成が、各学年の1年間の取り組みや部活動及び進路実績などを、私たち教職員が振り返る契機となるよう編集を進めている。「孝友」の特集は、「移転10年10大トピックス」として、移転後の10年を振り返る企画とした。 ウ）令和4年度の開校記念式典における記念講演の講師には、日本における女性学、フェミニズム研究の第一人者である上野千鶴子氏に内定している。「講演を楽しみにしています」と、教職員から声を掛けられることもあり、教育活動の啓発・触発の一助になれば企画を担当した部署として嬉しく思います。	A
	図書課	62	読書リテラシー、資料活用のための情報リテラシーの育成。	ア）新入生に対する図書館ガイダンスの実施。 イ）図書館利用授業に際して、司書より図書検索の方法のレクチャー、オンラインデータベースの活用指導。 ウ）校内ビブリオバトル大会の開催、県高等学校ビブリオバトル大会への参加（検討中）。ポップコンクールへの参加。	ア）中高一年生全員に対して図書館利用オリエンテーションを実施し、「図書館ガイド改訂版　図書100選」を配布して、読書や調べ学習による図書館の活用を促した。 イ）総合学習（緑風塾）や図書館授業にあたって、関連書籍にレファレンスや蔵書検索のサポートを行った。また、オンラインデータベースの紹介や他館の蔵書紹介なども行った。 ウ）毎月「図書館のお知らせ」（教室掲示／web掲出）を発行し、読書への関心興味が高まるよう促した。	A
		63	生徒図書委員会活動の発展支援。	ア）市立中央図書館との共催で「図書委員のおすすめ！」企画（調整中）。図書委員による選書とポップの作成と展示。（後期） イ）文化祭において、ビブリオバトル校内予選、チャリティー古書市の開催。 ウ）図書委員による店頭選書企画。	ア）昼休みのカウンター当番による図書の貸し出し・返却作業や蔵書登録作業を通して、図書館実務を通して生徒の興味・関心を喚起した。 イ）図書委員がお勧めの本を一冊選び、POPを作成して全校生徒に公開することによって、図書委員自身が本に改めて向き合うとともに、他の生徒の本への興味を喚起した。 ウ）行事に伴う展示の作業補助や、月ごとの企画における図書の選択・紹介を行ってもらうことで、日本の伝統行事に関わる啓蒙に携わった。	A
		64	図書館利用活性化のための環境整備と広報活動を充実させ、調べ学習における図書館利用や家庭での読書推進をはかる。	ア）「図書館のお知らせ」を通しての読書啓蒙、話題や注目本の紹介。 イ）新着本コーナーでの月次新着書籍の紹介と、西側展示スペースでの月次新着書籍の紹介。 ウ）中央掲示板での各種企画、カウンター前での時事関連注目書籍の紹介。	ア）総合学習や各教科における授業で活用できるような選書の充実をはかり、年間で約1,700冊の書籍を整備した。 イ）「図書館のお知らせ」や通路側の展示スペースで新着本を案内し、読書への興味喚起を進めた。 ウ）掲示や特集コーナーを積極的に展開したほか、大学入試にも関わる図書や資料の整備を進めた。	A
	国際交流課	65	コロナ禍の中ではあるが、国際交流プログラムを活性化させ、生徒に様々な機会を提供する。	ア）受入れ事業を安定させるために、ホストファミリーバンクへの登録を各学年20名以上確保する。 イ）派遣事業における宣伝や説明等を強化し、希望者を確保する。 ウ）英会話を学べる機会を確保するためのSGT等の充実。	ア）夏期休暇期間中に、希望者29名に対してISAによる「グローバル・コンピテンシー集中講座」を開講した。講座内では、オールイングリッシュで、自らの意見を積極的に出し合う授業スタイルを体験することができた。 イ）春期特別講習の午後、CURIOUS WORLDによる「オンライン・フィリピン留学」を計画し、募集している。講座内では、初級者用の英会話コースと中・上級者用のフィリピンの学生との協働プロジェクトを体験することができるコースとがある。	B
		66	中・長期留学生の受入れの検討。	ア）派遣斡旋団体との連絡をとり、コロナ禍終了後すぐに留学生を受け入れられるよう体制を整える。 イ）留学生が来た際には、ALTによる中・長期留学生の日本語指導を行う。 ウ）中・長期留学生への月1回のインタビューを通して、諸問題を一緒に解決する。	ア）JAAC日米学術センターの担当者と連絡を密にして、コロナ禍が終了したら、すぐに受入れ開始できるように準備している。	B
		67	スケジュールの視覚化と業務の共有。	ア）校内ネットワークを使用し、国際交流課作成の文書の共有。 イ）各行事前に、課員間でしっかりとコミュニケーションを取り合う。	ア）分掌会議を定期的に開き、行事の確認や意見・提案を聞くことができた。 イ）校内メールで、連絡を取り合った。 ウ）分掌内で、仕事を分担することができた。	B
事	総務課	68	財務状況の改善	ア）計上済み予算について事業の重要度及び優先度を再確認し、実施の是非を検討する。 可能なものについては事業規模の見直し、次年度以降への繰越を行う。 イ）見積合せの実施を徹底し、支出の削減を図る。補助金や助成金等を積極的に活用し、収支の改善を図る。 ウ）20,000千円の収支改善を目指す。 ※改善額の20,000千円は事業活動収支改善と資金収支の施設設備関係支出削減を合わせたものとする。	ア）見積合せの徹底や事業ごとに実施の是非を再検討し可能なものは翌年度以降へ繰越するなど、支出の削減を図った。 イ）補助金の申請を積極的に行うとともに卒業生や一般の方に向けた寄付募集（教育環境整備事業他）を開始し、増収を図った。 ウ）新入生増による増収やコロナ禍（事業の中止、縮小）による経費減の影響もあり、本年度決算見通し（2月末現在）で事業活動収支が対当初予算51,000千円の改善となった。	A
		69	施設・設備新設・更新の計画的な実施	ア）今年度計画（予算化）されている施設・設備工事を再確認し、確実に実施する。 イ）谷田グラウンドサッカー部部室建替工事の円滑な実施を図る。 ウ）来年度以降の教室不足に備え、既存教室の改修・増築等の計画決定及びその対応を速やかに行う。	ア）今年度計画されていた施設・設備工事の確認を行い速やかに着手した結果、すべて実施済みとなっている。 イ）谷田グラウンドサッカー部部室建替え工事について、7月より工事が開始され、大きな問題等もなく予定通り10月に竣工・引き渡しとなった。 ウ）来年度より発生する可能性がある教室不足に備える為、その対応策の検討を行った。その結果、図書館棟3階（屋上）改修工事及び教育棟増築（3教室）工事を行う事となった。図書館棟3階（屋上）改修工事については現在工事中であり、今年度中の竣工（昨今の情勢による資材調達の遅れにより5月中旬となる可能性大）を目指している。また、教育棟増築（3教室）工事については現在設計を依頼しており、来年度中の工事・竣工を目指している。	A

務局	学務課	70	学納金の確実な収納	ア）生徒・保護者には、年度始めに「授業料等納入計画表」を配付。 「授業料納付金収納状況」および「未納者一覧表」を毎月作成して管理職に回覧。 イ）オリエンテーションでの学納金説明について、より分かり易く伝わる内容で実施。 ウ）就学支援金・奨学給付金・授業料減免制度・各種奨学金の把握。 「変化する支援金制度＋本校の授業料見直しによる納付金の状況」を正しく理解する。	ア）生徒・保護者には、年度始めに「授業料等納入計画表」を配付し、月初めには振替日および納入額等を一斉メールで配信。「授業料納付金収納状況」および「未納者一覧表」を毎月管理職に回覧。2/1現在、中学未納1件¥62,000、高校未納6件¥386,190 イ）オリエンテーションでの学納金説明の資料は、学務課担当者が各々内容を確認し、毎年内容を更新。 ウ）就学支援金・奨学給付金・授業料減免制度・各種奨学金の把握。毎年のように変更のある就学支援金・授業料減免制度を、分かり易く保護者に伝えるように努めている。R4(2022)年度から対象世帯が拡充される授業料減免制度については、担当職員で変更点を共有。	A
		71	入学定員の確保（中学90名、高校360名）。 中学志願者(前期のみ)1．5倍以上、高校志願者　単願170名、併願1200名以上。 他の公立上位校から本校への単願者を増加させる。	ア）定員確保を必達目標として今年の高校入学者数の増加について詳細に分析し、今後に繋げる。 分析資料　：　参与作成の「令和2年度　学校訪問に関する報告書」 イ）本校の魅力を広報活動で地域、小・中学校関係者、保護者等に伝え、中高ともに定員の確保を図る。 魅力　：　カリキュラム、進路指導、多様な生徒の進路実績、新大学入試への十分な対応等 ウ）昨年度、体験入学等の申込をHPに集約したことにより、児童・生徒・保護者が頻繁にHPを閲覧するように誘導できた。今年度は一層の内容充実と適格かつスピーディーな情報提供に努める。	ア）定員確保を必達目標としてR3年度の高校入学者の増加について詳細に分析。毎年、参与が作成する「学校訪問に関する報告書」を活用する。R4年度入試　中学志願者 137人 入学予定 98人で定員確保。高校志願者 単願 213人 併願 1163人 計1376人。418人入学のR3年度の志願者1321人を超える志願者人数となった。 志願者増の要因のひとつとして、随時受付個別相談会がある。生徒・保護者の希望する日時に、管理職を中心に個別相談を実施。小学生28回、中学生64回実施。細やかな対応による効果は大きかったと考えている。 イ）本校の魅力を広報活動で生徒・保護者、小・中学校関係者に伝える。出願前の相談表の数字では、静岡地区が昨年740人から823人、清水地区が昨年265人から291人に増加。広報担当として地元の増加は嬉しい結果である。 ウ）イベント申込システムmiraicompassの活用により、情報発信をHPに集約。申込時に登録されたメールアドレスへの配信により、コロナ禍のイベント変更について確実に伝えることができた。Miraicompass担当職員がシステムをよく勉強・理解したことが様々な活用に繋がっている。	A
		72	総務管理課との協働　＋　学校組織全体で対応する広報活動	ア）総務管理課と協働した1年目を振り返り、「学校案内」制作、体験入学等の運営に反映する。 イ）若手教員、場合によっては生徒を加え、本校の魅力を伝える力をつけて、広報活動に参加してもらう。 ウ）広報制作物の外部業者とは、各々の得意を活かした棲み分けにより、経費削減＋新規企画を一緒に考える関係を築く。	ア）総務管理部長と学務課入試広報担当で原案を考え、必要に応じて管理職の意見を伺いながら生徒募集委員会や総務委員会へ提案をする流れが整った。委員会で了承された件は、総務管理部長から担当教員に丁寧に依頼をすることで、教員の協力を得ていく。丁寧な声かけで教職員を巻き込んでいくことも目標とするところである。 イ） ウ)広報制作物の業者とは、各々の得意を活かした棲み分けにより、経費削減＋新規企画を考える関係を築く。例えば卒業アルバム制作業者による広報用写真・動画の撮影。 年度毎の写真撮影や動画撮影のプランを立案し、計画的に制作していく。	A